

松本千代栄研究

— 舞踊研究の開始 —

順天堂大学(非)
鎌倉女子大学

中村恭子
安村清美

研究目的および方法

本研究は、戦後日本の舞踊教育をリードしてきた松本の舞踊研究について、昭和27年東京教育大学着任から昭和37年清里研究会で指導者養成に力を注ぎ始めるまでの約十年間を「舞踊研究の開始」の時期と推定し、現象性の舞踊を対象としてその研究法をも開発しつつ、舞踊の特性と発達をみようとした成果を明らかにすることを目的とした。研究方法は、この時期に発表された文献資料から、研究の着眼・発想、その成果を考察した。

結果および考察

1. 研究の出発と展開の過程

(1) 教育現場の実態調査および実験授業観察

松本は東京教育大学着任直後から竹之下休蔵氏らとの共同研究を開始。「農・工・商業地域における学校教育の実証的研究」s.27～29では、川崎と韭山の小・中学生の実態調査を行い、学習者の発達段階と生活環境による舞踊経験の違いを明らかにした。続く「グループ学習の指導に関する実証的研究」s.30～32では、同対象者に対して実験授業・観察を継続的にを行い、「既成作品と創作」s.31で、既成作品による一斉指導と創作によるグループ学習の学習効果の差異を明らかにした。この実験授業を含む共同研究は、日本の体育における一斉指導からグループ学習・自主創造的学習への転換の根拠を示した、重要な研究の一つといえよう。

これらの研究により、舞踊という時空間の現象・主観的価値観に基づく行為を、実態調査および授業実践・実験・観察により分析する、実験検証的研究の基礎が築かれたと考えられる。

(2) 著書「舞踊美の探究」に見るひとつの結実

これらの研究成果は、奈良女高師付小時代の論考と指導の実践と併せ、昭和32年の著書「舞踊美の探究—舞踊理論と指導法」にまとめられている。

前編『舞踊美の探求』では、舞踊美の特質について当代の哲学や心理学、経験美学的立場の論を援用しながら論及。舞踊表現のメカニズムを知覚心理学の原理をふまえ、全体と部分の関係から捉えている。この論述上における構造の把握は、後の「舞踊用語の研究」や「舞踊の構造・機能と要素化」などの研究の基礎となると考えられる。

後編『教育への活用と指導法』では、創造的自己表現と集団創作を二つの軸として、人間発達と教育学・教育心理学をふまえ、個と集団相互の交渉の中で、美的活動の全体性を経験することに舞

踊の教育的意義があると捉えている。実践経験と学問的論拠を得た指導書であったといえる。

(3) 舞踊創作の発達過程についての実験実証研究

「舞踊美の探究」以後の松本の研究視点は、独自の発想に基づく舞踊研究へと発展。「美意識の発達」s.35～37、「舞踊の鑑賞に関する研究」s.38～39などでは、小・中・高・大学生に創作作品を鑑賞させ、発達段階による作品の受けとり方の違いを比較分析。鑑賞能力の評価尺度として、表現内容、技能構造などを分類設定した。表現する主体の側からではなく、鑑賞する側から舞踊のメカニズムを解明して、舞踊表現の伝達原理を探ろうとした着眼点は、独創的といえる。

「舞踊の創作能力の発達に関する研究」s.38～39では、小学校2・4・6年生の同一人物に対し、10ヵ月ごとに継続して同一課題「激しい風が吹く」を与え、その作品および創作過程の変化から発達段階と創作能力の関係を明らかにした。同一人物に対する継続的な実験研究は前例がなく、条件を整えて発達過程を追跡調査するという科学的アプローチによる研究の意義は大きい。

また、「舞踊の創作・鑑賞能力の発達に関する研究(第2報)」s.39では、創作過程の4段階区分(仮定期、探索期、強化期、完成期)や鑑賞能力における作品の感情価(感情語・運動発想語)など独自の分類を検討。後に行う創作学習指導の学習過程や「7モチィブス」の研究における、運動の質と感情価の研究視点を得たと考えられる。

2. 「学」としての“舞踊”の認証

舞踊学の確立に必要な研究視点を意欲的に開発した活動とその成果は、従来その価値をあまり認められていなかった舞踊を学問として高め、体育学の中で認証させるに至っている。昭和40年には「舞踊の創作鑑賞能力の発達に関する研究」が学術誌「体育学研究」(第9巻第2号)に採択・掲載された。舞踊に関する研究が学問としての認証を得、初めて学術誌上に掲載された意義は大きい。これらは、昭和38年の東京教育大学における「舞踊学」講座新設、翌39年の同・研究科新設など、教育研究機関における制度的充実をもたらした。

3. 制度への反映と普及

松本は昭和22年の学習指導要綱作成以降、昭和43年まで、指導要領の改定のために継続して関与してきたほか、昭和23年からは学習指導要綱伝達講習会講師、昭和32年からは文部省体育実技講習会講師を務めるなど、制度の普及に貢献している。また、昭和28年より舞踊創作を支え、引き出すための音楽の創案・監修を手がけ始め、教育現場の学習指導を援助・推進している。

以上から、この時期の研究は松本の研究課題・方法の基礎をなし、その研究成果は着実に教育現場へ還元・普及されていたと認められた。